

# やる気 応援奨学金

Report  
奨学金  
Vol.144



法学部独自の奨学金制度  
「やる気応援奨学金」を利用した  
学生の体験をご紹介します

## 神秘の国、エジプト・カイロへ

私は、一般部門の「やる気応援奨学金」をいただき、1年次の春休みに1カ月間、エジプトの首都カイロに留学しました。

私は、高校時代のギリシャ旅行で中東からの難民を見て以来、中東情勢に関心を持ち、特にシリア難民をはじめとする中東の紛争の原因とした難民の現状について調べたいと考えていました。そこで、中東地域の根底にあるイスラムの文化や世界観にも直接触れたいと思い、さまざまな条件を考慮した結果、エジプトへの渡航を決めました。また、エジプトではアラビア語を学修するため、現地の語学学校にも通うことにしました。

エジプトはピラミッドに代表される

ような観光大国ですが、実はそれだけに留まらず、地政学的にも現在の中東情勢にとって重要な役割を担っている国であることが、今回の留学を通してわかりました。

## アラブ地域でアラビア語を学ぶ

語学学校は、カイロの中心地であるタハリール広場の近くにあり、付近にはツタンカーメンのマスクがあることで有名な考古学博物館もあります。また、この広場はカイロ市内随一の繁華



スフィンクスを背景に元国連難民高等弁務官事務所職員の方（中央）と



語学学校の先生（左）と教室で

街であるため、現地の人のための庶民的な店から、観光客向けの土産物屋までたくさんのお店があり、毎日多くの人でにぎわっていました。

授業の形式は自分で選択できたため、私は個別授業の形式を選びました。そのため、自身のレベルに合わせてじっくり学習することができました。

宿泊先は、現地の一般的な集合住宅の一室でした。ほかの部屋にはエジプト人が住んでおり、毎日顔を合わせて挨拶を交わすうちに顔見知りになり、親切に接してもらえるようになりました。私は、買い物やレストランでの食事のときも、できるだけアラビア語を使うように心がけていました。1カ月という短い期間でしたが、アラビア語

## エジプトで見た 中東のすがた

うきすとしき  
浮須俊樹

法学部政治学科3年  
国立東京学芸大学附属高校(東京都)出身

の基本的な文法や会話の方法はしっかりと身についたように感じます。

## 現地での調査活動について

今回の留学の主な目的は調査活動でした。調査内容はイスラム文化についてと、シリア難民に重点を置いた難民の現状についての二点でした。前者を調査するにあたっては、日本学術振興会カイロ研究連絡センターの研究員の方にインタビューを行いました。また、後者については、在エジプト日本大使館の書記官の方と、元国連難民高等弁務官事務所の職員の方からお話を伺いました。

今回、イスラム文化と難民問題の二つを関連づけて調べたのは、中東地域やイスラム圏で続く紛争の解決のためには、その地域の文化を理解すること

がたいへん重要であり、それが難民間題の解決につながるかと考えたからです。しかし、イスラム圏の対立の根底にある問題は、想像以上に複雑でした。一口にイスラム文化といっても宗派によって大きな違いがあり、もはや一つの文化とは言えないほどの多様さがありました。また、エジプトにおいてはイスラム教間の宗派対立というよりは、古くからキリスト教の一派との対立が目立っていました。このように、同じイスラム圏においても国や地域によって対立の原因が異なることが、中東情勢を複雑化させているのだと改めて感じました。

しかし、どんな状況においても難民の支援は必要です。エジプトは、シリア難民がヨーロッパに渡るための中継地点として位置づけられていました。しかし今回の調査を通じて、難民のなかにはエジプトで職を得て定住する人が少なからずいることがわかりました。もし、エジプト国民と難民の共存がうまく機能しているならば、新たな難民支援のあり方をここから考えることができるのではないかとも思えました。

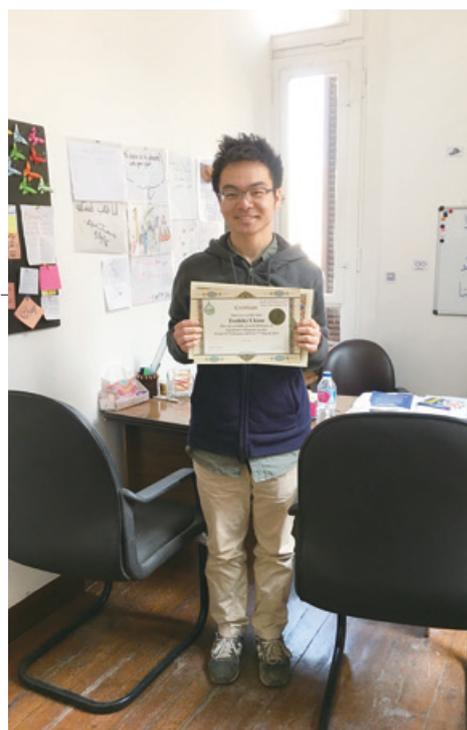
### 気づきをくれたエジプト留学

今回のエジプト留学での経験から、

まったく知らない価値観を持つ人々にたくさん出会うことができました。そのなかで、中東地域に見られるような価値観の相違から生まれる対立の解決の難しさを、身をもって感じる事ができました。今後も中東地域の難民間題について、継続して調べていきたいと考えています。

今回の渡航にあたり、相談に乗ってくださり、このような機会を設けてくださった平山先生、安藤先生、目賀田

先生、松田先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。



最終日、語学学校の修了証をいただきました

From the Faculty of Law



法学部だより



## 法学部生の交換留学

法学部事務室  
ばん 伴 ささら

本学には半年以上の長期留学として、交換・認定留学の制度があります。近年、特に交換留学を希望する法学部生の様相が変わってきたように感じていますので、列挙していこうと思います。もしご子女に留学への興味があるようでしたら、検討の一助となれば幸いです（交換留学とは、およそ200の海外協定校へ半年～1年間の留学ができる制度です。学部内と全学で審査・調整が行われます）。

### 1. 希望者の増加(特に女子学生)

2019年度中に長期留学に行くことを希望した学生は39名、2020年度は45名と、毎年人数が増えています。また、2019年度希望者は男女比はほぼ半々だったのが、2020年度には3:7と、女子学生の留学希望者が急増しました。学びた

い分野としても、女性の社会進出やジェンダー、多様性に関するものが多く挙げられることも特徴かと思えます。

### 2. 長期留学する学年の変化

以前は3・4年次に留学する学生が多かったのですが、最近では2年次での留学を希望する学生が増えています。高校ですでに留学を経験し、大学入学の時点で長期留学を視野に入れている学生が多いようです。

### 3. 北欧人気

留学先として、スウェーデンやデンマークの人気はこれまでも高かったですが、2020年度は留学希望者の45名中、なんと20名がスウェーデンとデンマークの大学を第1希望にしていました。やはり女性の社会進出や社会福祉制度への興味が高いことが理由と言えるでしょう。また、英米に比べて英語力の要件が低いことも理由の一つかもしれません。ただ、交換留学では1つの協定校に派遣できる人数に限りがあり、競争率の高い大学にばかり応募してしまうとどこにも留学できなくなってしまうことがあります。交換留学先は3つまで希望が出せますので、ご自分の興味も大切にしつつ、希望する国を分けてみるのも交換留学へ行ける可能性を上げる手段かと思えます。